

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分、宮城県・牡鹿半島沖の海底を震源とする巨大地震が東日本を襲った。地震の規模は日本における観測史上最大のマグニチュード九・〇。震源域は岩手県沖から茨城県沖までの約五百キロの広範囲に及んだ。地震により場所によっては最高四十メートルにも及ぶ大津波が発生し、沿岸部に壊滅的な被害をもたらした。震災が原因で亡くなられた方がいまだ行方不明の方の数はあわせて一万八千人を超えるといわれる。

地震発生直後、福島県浜通り地方に位置する東京電力・福島第一原子力発電所では、稼働中だった二号機から三号機の原子炉が緊急停止した。地震により敷地内の送電線が断ち切られ、外部電源が途切れる。原子炉を冷却するための非常用ディーゼル発電機がすぐに稼働したが、午後三時三十分ごろから到来した大津波によってほとんどが水没。冷却機能を奪われた一・二号機はその後、核燃料が溶けて圧力容器の底に落ちる「メルトダウン」の状態となり、放射性物質を施設外に拡散させるという日本の原発史上最も恐ろしい状況を作り出した。

あれから一年以上が経過した。家族や親しい人を失い、故郷を追われた被災者の方々は、深い喪失感の中にあつて、しかし少しずつ新しい生活に向けて立ち上がろうとしている。街の再建や仕事の確保、膨大な量の瓦礫の処理など、問題は山積みであるが、それでも復興に向けた歩みを確実に続けている。

一方、原発被害の問題は、予測不可能な形で多様化し、ますます深刻さの度合いを増している。地震や津波による自然の災害は「無常」の現実を私たちに突きつけたが、原発災害は「無明」という、人間の愚かさを露呈することになった。特に「無明」の問題については、甚大な被害を前に、私たち人間には精神と生活との大転換が迫られた。

真宗門徒が真宗門徒で

愚禿と名告った親鸞聖人 — 忘れない —

木越康



〔略歴〕一九六三年カルフォルニア州生まれ。大谷大学短期大学部助教授を経て、現在、大谷大学文学部准教授。著書：『キリシタンが見た真宗』（共著、東本願寺出版部）『仏教とキリスト教の対話』（共著、法蔵館）など。

た。それにもかかわらず、恐ろしいことに人間は、「再稼働」という形で、愚かさをそのままにさらなる発展と安定とを企てる。何をもちて発展とするのか、何をもちて安定とするのか、人間の渴望にもとづく世界は、まさに「魔郷」である。故郷にいつ帰ることができ、豊かな大地はいつその生命を回復するのか、放射能による汚染は子どもたちにどのような影響を与えるのか、被災された多くの方々が未来に向けた深い不安の中に置き去りにされたままである。

報告と御礼
先月7月20日号にて端切れ・古布・着物の切れを募集したところ、皆様より多数お寄せいただきました。集まりました切れは女川町に送付いたします。ご協力誠にありがとうございます。

飛騨御坊ボランティア委員会

あそんだ! つくった! であった!!

～夏のつどい2012～

7月25日(水)～26日(木)、栗野保の恵林寺を会場に「児童夏のつどい」が開催されました。飛騨全域から集まった95名の子どもたちが参加し、川遊び、すのまたふるさと学校を利用した五平餅・豆腐作り、薪割りなどの体験学習やキャンプファイヤーなどをして、大変楽しい2日間を過ごしました。



子どもたちの感想

- ・体験学習をして、昔の人はこんなに苦労して食べ物を作ってた、なんて大変だったんだろなと思いました。
- ・とうふがどうやって作られるのかわかってあもしろかったです。
- ・まきわりのオノツアんなにも重いものなんだなと思いました。
- ・自分の住んでいる地域以外の友達がたくさんできてよかったです。



豆腐作りの話を聞く子どもたち

- ・川であそんだことがなかったけど、泳いでみたらいっぱい魚がいてびっくりしました。
- ・自分で作った五平餅おいしかった!
- ・今年6年生で最後の参加になるけど来年からは中学生スタッフとして参加したいです。

住職の言葉

今を生きる

朝日高根組 法正寺 長尾昭夫

この頃、朝の目覚めが早くなったようです。そして「生きていた」の思いから「生かされていた」という思いに変わります。昭和の初めに生まれ、生かされてきました。多くの人生経験をしながら、今を生きる老いの身を、しみじみ感ずる今日この頃です。振り返ってみて、昭和から平成時代にかけては、物質に恵まれ豊かな暮らしができたことを当たり前のようにしてきました。

「あの人が死んだなんて信じられない」とよく言われます。一般的には生きていたことが当然で死ぬことは特別なことだと思われています。しかし、事実とは全く逆で、「生は偶然(たまたま)、死は必然(当たり前のこと)」であります。ご縁によって、今生かされている私は、金子大栄先生の「一日の空過はやがて一生の空過になる」の教えに目覚めさせられます。無常だからこそ、今日一日が有り難いことです。「今日という日は一度しかない人生」であります。これを仏の教えでは「無常」というのです。無常とは単に、はかなさや、なさけないことではありません。それは、ものの在り方の本当のすがたを、そのまま言った言葉です。「生かされゆく老いの身」を、振り返り有難く思っております。この年齢になって、連如上人様の歌を、なつかしく思い左記して終わります。

年月のつもりくいてけふはや
八十地あまりの初春の空

定例法座法話(午後1時から) ○8月21日(火)：廣瀬瑛氏 ○8月27日(月)：大町慶華輪番 ○8月28日(火)：伊達秀氏氏 ○9月1日(土)：光本智見氏 ○9月11日(火)：大町慶華輪番 ○9月13日(木)：藤守博氏

一六六〇(文應二)年十二月二日、親鸞聖人八十八歳書写の『弥陀如来名号徳』を最後に、聖人の著作というものは伝わっていない。これも関東の同朋に請われて、書き送ったことが『親鸞聖人御消息集』広本第十七通(十月二十一日付)に見えるので、この消息もその頃の最後のものと考えられている。

一六六二(弘長二)年十一月になつて、聖人は体調を崩されたようである。これを『御伝鈔』では、「聖人弘長二歳壬戌仲冬下旬の候より、いささか不例の氣まします。それよりこのかた、口に世事をまじえず、ただ仏恩のふかきことをのぶ。声に余言をあらわさず、もつぱら称名たることなし」と伝えている。この危篤の知らせは、覚信尼から越後の恵信尼に報告されたようで、益方(有房)が急いで越後から京に向かい、「恵信尼消息」(第三通)では、「益方も御臨終にあいまいらせて候いける、親子の契ともうしなから、深くこそおほえ候えば、うれしく候う、うれしく候う」と間に合ったことを喜んでいる。恵信尼は、同便と考えられる第四通で、「一六六三(弘長三)年に「今年には八十二になり候う」と語り、「昨年の霜月より、昨年の五月まで、すなわち一六六一年十一月から一六六二年五月まで大病を患い病臥していたことを示し「今や今やと、時日を待ち候いしかど



も、今日までは、死なで」と述べている。そこには体調さえ許せば、益方と同行して、越後から京に赴きたかつたというひそかな気持ち溢れているように感じられる。

西本願寺には、一六六二(弘長二)年命終の直前の十一月十一日と十二日付の聖人真筆の二通の消息が保存されている。一つは「いまごせんのはへ」と宛て花押が、もう一つは「ひたちの人々の御中へ」と宛て「せんしん」と「若し」花押がある。今御前の母と即生房の行く末を心配して、自分に「そろう」所

などがある。未だに確定されてはいない。諸説ともに聖人の近親者と見ることに違いはない。聖人は、病床にあつても、近親の者を氣遣っていることがわかる。

『御伝鈔』は、その最期を「(仲冬下旬)おなじき第八日午時、頭北面西右脇に臥し給いて、ついに念仏の息たえましましおわりぬ。時に、頰齡九旬にみちたまう」と表わし、十一月二十八日(太陽暦一六六三年一月十六日)、念仏の声と共に息を引き取つたと、簡潔に語っている。老衰と見られ、静かな最期であつたようである。この「午時(正午)」という時刻は、高僧の入滅に合せて修辭されたもので、「安城の御影」(『存覚袖日記』)や西本願寺「教行信証」の古写本に記されている「未時(午後二時)」が史実ではないかとされている。場所については、「御伝鈔」は「禪坊は長安湯郷の辺、押小路の南、万里小路より東」とあるが、それは晩年住居した弟尋有の里坊善法坊のあつた三条富小路のことである。

枕辺には、子どもの益方と覚信尼、孫の覚恵と光玉、弟の尋有を初めとする日野家の人達、常隨の蓮位と若狭が別れを惜しみ、遠江の専信や下野の顯智などの門弟が駆けつけた。「御伝鈔」(康永本)には、僧形の男十二人、俗体の男と女、縁先の従者らしき二人の計十六人、みな泣いている姿が描かれている。

「回壇案内」

- 【8月】
- 21日(火)常照寺「朝日町」
 - 22日(水)敬勝寺「白川村」
 - 24日(金)誓願寺「片野町」
 - 25日(土)蓮徳寺「山田町」
 - 了徳寺「清見町」
 - 福寄同行「清見町」
 - 26日(日)淨覺寺「山田町」
 - 聖圓寺「宮川町」
 - 了因寺「清見町」
 - 一念寺「清見町」
 - 満成寺「清見町」
 - 植谷寺「清見町」
 - 長圓寺「朝日町」
 - 寶蓮寺「朝日町」
 - 正覚寺「朝日町」
 - 27日(月)圓城寺「朝日町」
 - 28日(火)専念寺「鉄砲町」
 - 明善寺「白川村」
 - 30日(木)寶藏寺「莊川町」
- 【9月】
- 2日(日)南春寺「国府町」
 - 淨慶寺「古川町」
 - 憶念寺「古川町」
 - 4日(火)淨水寺「古川町」
 - 5日(水)了心寺「山口町」
 - 6日(木)願徳寺「河合町」
 - 長林寺「清見町」
 - 蓮勝寺「莊川町」
 - 7日(金)誓願寺「古川町」
 - 8日(土)了宗寺「莊川町」
 - 9日(日)照進寺「堀端町」
 - 遊浄寺「莊川町」
 - 17日(月)東等寺「冬頭町」

※時間などの詳細は会所寺院にお尋ねください。

御坊の朝

夏の晩天講座

今年も八月一日(五日)、高山別院本堂において「晩天講座」が開かれました。朝六時三十分より正信偈を共ににお勤めし、その後、各先生方よりお話をいただきました。

初日の下畑五夫氏(飛騨地学研究会々長)には「蓮如峠と活断層」と題し、蓮如上人が飛騨へ入られた道のりと活断層の関係、飛騨の地震の歴史、また活断層は地震という禍をもたらすが、水の豊かな大地という恵みもたらしてくれているのだということをお話しくださいました。三日には西水由典氏(高山市社会福祉協議会々長)により、高齢化社会を生きぬくため「お互いに支え合う地域づくり」についてお話しいただきました。また、四日には昨年の震災を受け、福島より下呂に移られた佐藤慶太氏(フローラメモリ

アルホール下呂勤務)に「震災当日の状況」を聞き、被災された方の生の声を聞かせていただきました。この五日間は毎日百名を超える方がお参りに来られ、早朝より真剣にお話を聞いていました。これをご縁として、引き続き、別院のお朝事(午前七時より)にも足をお運びください。

「坊文化講座」

会場 別院庫裡ホール
時間 午後1時30分
会費 1回毎600円

【第2回】
期日 8月20日(月)
講師 江馬 雅人氏
(益田組賢賢寺)
講題 「飛騨の真宗門徒」

【第3回】
期日 9月15日(土)
講師 池之端 甚衛氏
(元日蓮高山支局長)
講題 「飛騨御坊の幻の宮殿と須弥壇」

別院で仏具のおみぎ

七月二十四日、高山別院本堂において「仏具のおみぎ」が行われました。おみぎは、別院のお朝事に参拝される方、別院の直参門徒、一般の方々合わせて約三十名が集まり、別院の仏具の大きさに奮闘しながらも、時間をかけて丁寧に磨いていました。



秋の彼岸会・永代経法要

9月19日(水)～25日(火)
午後1時から勤行・法話

亡き方をご縁として仏法に出遇う大切な仏事です。ぜひお参りください。

